



鬼射の的の製作

鬼射の神事に使用される的は、今でも毎年手づくりされています。
 これまでのづくりを担当してきた石切山良作さん(88歳)に
 的づくりについて聞きました。

的づくりを一緒にすることで 見た石切山さんの功績

今年からのづくりの手伝いをしている土屋晴美さんと土屋忠明さんに同行して、鬼射に使う的づくりを見学しました。始めに的の部材づくり。まず、的の支柱となっている真竹(まだけ)から水分を出すために、3日ほど前に真竹を山から切って保管しておきます。その後、竹を割いて竹ひご(約1m)を作ります。竹を割くのは細かな技術が必要なため、中々すぐに真似できるものではありません。次に、その竹ひごを編んで的の骨組みを作ります。鬼射の日が近づくと最後に的の表面に(的には表と裏がある)紙を貼り、裏側に鬼の文字を書き完成します。的は昔から四方約1m(3尺3寸)の正方形で、他に拝殿用のものと鬼射当日に一般参加者に配布する小的を製作します。今回お話を聞いた石切山良作さんは、平成の初め頃より製作の手伝いをしていたようで、的が鬼射奉納の神事に必要不可欠であるとわかっていたので、当時は懸命に作業工程を覚えてと語ってくれました。昔は年一回の鬼射奉納神事のために、年寄り(60歳以上)が禰宜(※)の家に集まって、作り方などを若い人たちに伝えていました。余談ですが、その時に禰宜は集まった方にあんころ餅を振る舞うなど、ご馳走し接待をしていたそうです。この餅は、正月の神社への参詣の時のものを使用していたとのことです。良作さんは禰宜の家で先輩の方に教えていただき、的を作製できるようになったそうです。この集まりは伝承の場でもありました。ただ、今ではこのような場が少なくなり、また、山仕事をする機会がなくなり、竹を扱う方が少なくなったため、的づくりの製作ができる方が良作さんだけとなり、ずっと一人で作られています。

※禰宜・・・「ねぎ」と読む。神職の事。



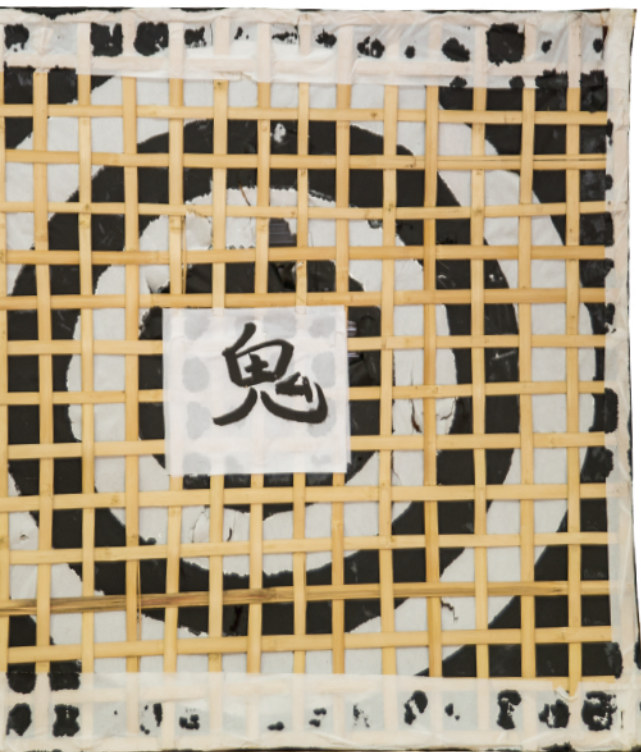
竹を薄く割く難しい作業をテキパキとこなす石切山さん



貴重になっている真竹の採取



的の骨組みを編む作業を教わる
 土屋晴美さん(左)と土屋忠明さん(中央)



石切山さんが以前作成した的

レポート後記

良作さんは、的づくりについて、素材(真竹)を確保することが一番大変だと言います。竹を切って下ごしらえをすることの方が難しいように思いましたが、真竹が手にはいらないことが問題だと聞き驚きました。

的づくりで一番楽しいことを聞いたところ、鬼射奉納時に矢が射られ、的に当たる音がした時が一番楽しいとのことで、良作さんの鬼射に対する思いが伝わってきます。

良作さんは、鬼射で使用する的を作る事が何よりの喜びであり、鬼射の神事で五穀豊穡と落合の繁栄を願うことが大切だと語ってくれました。また、落合集落で祭りをきっかけに宴で皆と集い、一杯飲むことも楽しいと言っていました。落合の地域の方にとっても鬼射がとても大切な行事であることがわかりました。

鬼射の的づくりの課題として、昨今の人口減少による後継者不足が挙げられます。鬼射という伝統的な行事が今後も続くよう今回の取材で多くの方に関心を持ってもらい、後継者が増えることを願っています。

下田まち遺産を守る みんなの一步

登山道やお地蔵さんを大切にしたい気持ちを継続したい



1. 登山道整備のために危険な木を除去 2. 登山道整備のために集まった参加者
 3. お地蔵さんの帽子と前掛けの取り替え作業 4. 前掛けが新しくなった登山道に立つお地蔵さん

高根山の登山道と山頂の整備

今回は河内区及び河内区有志会が12月11日に実施した高根山での整備活動についてご紹介します。

この整備は平成14年頃から毎年実施されており、河内区や河内有志会の約25名が参加し、山頂までの間で危険のある枯損木などをチェーンソーで取り除く作業を主に実施しています。また、この際に毎年参加している方が、すべてのお地蔵さんの前掛けと帽子を新しく手作りし、古いものと取り替える作業をしています。

この活動により、多くの方が登山道を安全に通りやすくなるだけでなく、お地蔵さんを大切にしたい気持ちも継続していただいています。ただ、河内の参加者は年々高齢化してきており、今後も存続するために若い方の参加を期待しているとの話でした。



《下田まち遺産》 高根山、高根山からの眺望

高根山は民話の残る山です。民話では、船が暴風雨にあった際、山頂のお地蔵様に祈願し、無事に船が難を逃れたことが伝えられています。高根山の山頂からは太平洋や伊豆七島などの島々が一望でき、人気のハイキングコースとなっています。